

体 育 科

1 育成したい「思考力」

- a めざす動きや生活と自己の現実を照らし合わせながら，自己の能力に合ったイメージをもち，適切な課題を設定する力
- b 課題解決に向けての手だてを選んだり，見出したりする力

- a めざす動きや生活と自己の現実を照らし合わせながら自己の能力に合ったイメージをもち，適切な課題を設定する力

「自己の能力に合ったイメージをもつ」とは，めざす動きや生活と，それらを実際に試してみたり振り返ってみたりすることによって捉えた自己の現実の有り様を比較したことを基に，「なりたいイメージ」を描き出す力のことである。

例えば，うまく開脚跳びをしたいと願った子どもが，自分の姿（自己の現実）と友達の動き（めざす動き）を比較する中で，「私は・・・だから，～のような姿勢で開脚跳びができるようになりたい。」などのイメージをもつことである。

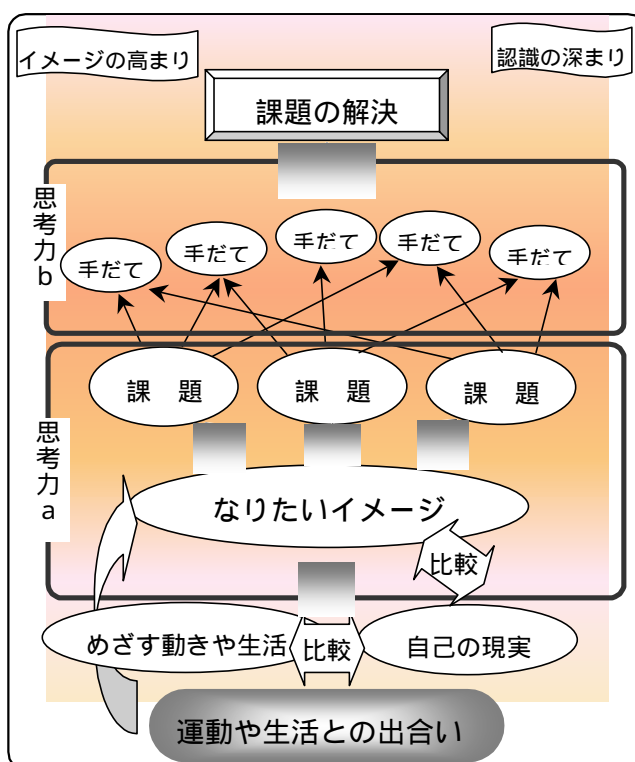
この自己の現実をどのように捉えるかは，後で述べる「適切な課題を設定する」上で大きな意味をもっている。それは，自己の現実が適切に認識されていないならば，めざす動きや生活との異同点も不明瞭なままで，その結果，「なりたいイメージ」が曖昧なものになってしまうからである。曖昧なイメージのままでは，適切な課題を設定することはできない。

また，「適切な課題を設定する力」とは，的確に捉えた自己の現実と，めざす動きや現実との比較から生まれた「なりたいイメージ」により近づくために，自己の現実を再度確認しながら，何がどうなればよいのかについて考える力のことである。

なお，技能の向上を求めない「体づくり運動」のように，運動内容によっては自己の現実との比較をしないで，なりたいイメージをつくる場合もある。

- b 課題解決に向けての手だてを選んだり，見出したりする力

これは，課題に対して，類似した過去の運動経験や生活場面を想起し，その際用いた手だてを生かそうとしたり，めざす動きを具体的に分析し，様々な要素に細分化したりして，解決を図っていく力のことである。



前者は、「跳び箱の開脚跳び」で練習方法を見出す際に、「手の突き放しを強く」という課題に対して低学年で経験した「馬跳び」を、また、「腰を高く」という課題に対して過去の遊びから「カエルの足うち」を想起するような思考である。

後者は、今の自己の現実に照らし合わせると、跳び方の美しさに関する課題である「腰の高さ」よりも、跳ぶ動きそのものの課題である「手の突き放し」に関する練習方法を選択するといった思考である。

無論、このような力は、保健領域においても必要である。

なお、本校体育科では、学習対象についての経験が少ない低学年では、解決の手だてそのものを見出す力よりも、教師の提示したいくつかの選択肢の中から自分に合ったものを選ぶ力を育成することを重視している。

2 「思考力」を育成する単元編成

(1) 既習経験や生活経験を生かした教材

子どもは既習経験や生活経験を生かして、動きのイメージをもったり、課題を見出したりすることが多い。そこで、子どもの思考活動を保障するためには、そのような経験を生かすことのできる教材を取り上げる必要がある。



例えば、低学年の表現・リズム遊びでは、ウサギやバッタ等、今まで触れあったことのある生き物や、遊園地のジェットコースターやメリーゴーランド等、遊んだ経験のあるものなどを取り上げる。ウサギやバッタは、ほぼ全ての子どもがそれらの動きを見た経験があるため、動きのイメージをもつことが容易にできる。また、ジェットコースターやメリーゴーランドなどは、実際の動きに加えて、その時の感情も加わり、より豊かな動きをつくり出すことができる。

また、保健領域では、中学年で骨づくりにより食事について考える単元で、日頃、自分が食べているメニューと骨づくりに適したメニューとを比較させる。そうすることで、「自分はカルシウムをあまりとっていない」等の課題を明確にもたせることができ、自分にとってよりよい食事のメニューを考えるための視点に気付かせることができるのである。

このように、既習経験や生活経験と結び付いた教材は、目標とするイメージを鮮明にもたせることができ、課題を見出し、その手だてを考える場面でも有効に働く。

しかし、個々により経験に違いがあったり、学習指導要領において各学年で扱う内容とそこで身に付けなければいけない技能が弾力的に設定されていることで、全員が同じレベルで既習経験をもっていない場合があったりすることも考えられる。このような場合には、子どもたちの実態から不足している経験を洗い出し、準備運動や下位教材に関連する動きを取り上げ、経験を補っておく必要がある。

また、経験はあるものの、動きにつながらない場合には、ビデオ等の視聴覚機器を活用してなりたいイメージ



をもたせ、動きのイメージを伴うことば（オノマトペ・比喩等）で表出させることにより、動きに気付かせることも必要である。

（２）相手意識を含んだイベント性のある教材の開発

育成したい「思考力」を内包した教材を与えても、その教材に対して、子どもたちが意欲的に取り組むことができなければ、「思考力」を身に付けさせることはできない。活動に対する関心や意欲が、子どもの思考活動の成否を左右することが多いのである。

特に表現運動においては、この傾向が顕著である。表現運動では、育成したい「思考力」として、「イメージに合った動きを工夫する力」を挙げることができる。しかし、高学年にもなると、いきなり「～のイメージを動きで表そう」というような教材の与え方をしたのでは、表現すること自体に対する苦手意識や抵抗感から、意欲的に学習に取り組めない子どもが増えてしまう可能性が出てくる。

そこで、単元内に子どもが関心・意欲をもてるようなイベント性のある教材を位置付ける。イベントには、一緒に活動する仲間、競い合う友達、見て評価してくれる観衆等の「相手意識」が必ず生まれ、子どもたちの学習意欲を喚起してくれるからである。



５年生では、ライオン・キングのミュージカル発表会を行った。ストーリーに従ってグループ毎に各場面の動きを工夫しグループの動きを合わせることで、一つのミュージカルを完成させるというものである。

この教材を導入したことにより、グループ毎の練習の際にも、自グループはもちろん、他のグループにも主体的にかかわりながら動き方を工夫していこうとする態度が見られた。

このように、表現運動にイベント性のある教材を導入することは、表現することに苦手意識や抵抗のある高学年の子どもに興味・関心も誘発するとともに、「イメージに合った動きを工夫する力」も育成できると言えよう。

単元末のイベントを含んだ展開は表現領域以外でも、基本の運動や器械運動などたくさんの領域で行うことができる。

（３）「時間」「空間」「仲間」をキーワードにした単元の展開

子どもが技能の向上や作戦・戦術の工夫を図る中で、「時間的な広がり」や「空間的な広がり」、「ルールの工夫（仲間とのかかわり）」等、目標の達成に対して考える要素を段階的に設定していく。

例えば、高学年のボール運動では、「個々にボール操作技術を習得する」段階 「ゲームの内容を知りルールを工夫する」 「自チームの特徴を生かした作戦を考える」段階、「相手チームに合わせた作戦を考える」段階、へと展開していくのである。

表現運動でも同様である。一つの題材を扱う場合でも、スピードの変化や空間の高低、人数の加減等の要素を加えることで思考活動は広げられる。また、保健でも総合的な



課題解決が必要な教材を用いることで、自分の生活を繰り返し追究させ、課題解決のおもしろさを味わわせることができる。



さらに、これまで思考する場面が比較的少なかった陸上運動、器械運動など個人運動の領域でも、先述の「仲間」や「空間」、「時間」等の要素を加味することにより、思考活動を増やしていくことができる。例えば、マット運動でも、人数を増やして集団マットを構成させることで、運動を組織することに関する「思考力」を育成することができるのである。

このように、各段階で「解決しなければならない問題は何なのか」、「どんな練習を行えばいいのか」等を見つめ直させることで、チームの作戦・戦術の向上とともに、課題を見付ける力や手だてを考える力を育てることができると思う。

また、このような展開では、ある領域で学んだ思考様式を、他の領域の活動へ転移するよう、領域間の関連指導を考えることも可能である。

例えば、高学年ではボール運動領域「バスケットボール」で身に付けた「空いたスペース（空間）を見つけてパスを回す」という思考様式は、「空間」というキーワードを基に、器械運動領域「シンクロマット」の「空間を生かした演技を考える」場面に転移させることができる。また、低学年の基本の運動「2人なわとび」で身に付けた「互いの気持ちを合わせてとぶ」という思考様式も、「かかわり」というキーワードを基に、ゲーム領域「シュートゲーム」の「互いに気持ちを合わせてパスを送る」場面に転移させることができるのである。



(4)「戦術学習」を通して思考の質を高める

本校体育科では、より高次の「思考力」へと高めていくことができるようにするために、「戦術学習」を取り入れる。そこでは、先行して学んだ思考様式を生かすように教材を配置する。

ボール運動を例に挙げて考えてみよう。「バスケットボール」では、パスをつなげるためには、「相手のいないところに動く」というボールを持たない者の動きに着目した思考様式を身に付けさせる。続いて、「サッカー」を配列することで「相手のいないところに動く」という思考様式をチームの作戦の中に取り入れて授業を展開することができる。さらに、新たな課題として対戦相手に応じた攻め方や守り方の工夫を考える等、より高次の思考への発展が期待できるのである。

この他、本校体育科では、先行して学んだ複数の思考様式を組み合わせる等の発展的な学習にも取り組んでいる。

